在京花巻人

発行　在京花巻人会
連絡事務所

東京都中央区東日本橋
3-5-9　市川ビル3階
電話　03-6661-1925

令和5年度の活動方針

在京花巻人会 会長　瀬川　紘一

早いもので、今年も7月9日（土）の「在京花巻人のつどい」の開催まで、あと1ヶ月半となりました。今回も会場は例年と同様、御茶ノ水の「東京ガーデンパレス」、受付時間は10時30分からと変わりませんが、開始時間を例年より30分繰り下げて11時30分とし閉会の時間も14時30分とさせて頂きました。どうぞ、友人知人をお誘いのうえご参加下さいますよう、よろしくお願い申し上げます。

今年度から6人の方に新しい理事に就任して頂きました。2020年に理事に就任した5人を加えると11名がフレッシュな理事となり、理事会も顔ぶれが大分変わりました。事務所も新しくなり、理事・常任幹事一同、心機一転張り切っていますので、是非「在京花巻人のつどい」に参加して頂き、一緒に盛り上がりましょう。

ところで、新型コロナの第8波は何とか収まりましたが、ウクライナでの戦争は終息の気配は全く見せていません。第三次世界大戦になるのか、核は使用されるのか、20世紀型の戦争が目の前で起こっていることに愕然とします。一方、日本は国際環境の変化に引きずられて、安全保障政策を大きく転換させようとしています。国内的にも、政治、経済、社会の先行きが見通せないことからくる不安が人々に蔓延しているようで、大きな危惧を感じます。

戦後と共に歩んできた80数年の自分の人生の中で、これほど世界と日本の現状に確信も自信も持てず、将来も見通せなくなってしまったことはなかったように思います。大きくは人類の歴史の進歩への疑問、そして日本の戦後の民主主義や平和主義への信頼が揺らいでいます。そんな煩悶の中で行きついたのが、戦前から戦後まで一貫してその思想を貫き、日本の近代を問うた浜崎洋介著「福田恒存 思想の〈かたち〉」でした。

福田恒存の態度は常に「理想」と「現実」の二元論にあります。まず「政治」とは「己の理想を傾けるべき対象ではなく、あくまで国家の事務であり消極的手段・手続」、一方「私」については、「自ら慣れ親しんできた〝過去からの歩き方〟に支えられてのみ、人は〝集団〟に対峙しうる」と述べ、その上で近代的自我の危うさを指摘し、「積極的目的を志向する個人」の追求が課題だとしています。

民主主義についても、「民主主義を否定しているのではない、民主主義だけではだめだ」と半世紀以上前に指摘していますが、この新しい自我の追求が、その答えになっているように思います。さらに、〝過去からの歩き方〟と言うとき、自らのルーツと生まれ育った土地が人間にとっていかに大切か、改めて気付かされます。私達のふるさと会の存在が意味あるものとするならば、まさにそこにあると思う訳で、この認識が今後在京花巻人会の活動を続けていく支えになりそうです。

さて、令和5年度の活動方針です。令和5年度も「会員同士の交流・親睦」と「ふる里花巻の活性化への貢献」の二本柱です。ただ、今年度から両領域とも活動をより活発化したいと思っています。そのために、理事会の中に「事業企画班」を立ち上げ新しい事業の企画検討に入りました。

「会員の交流・親睦」の活動では、「在京花巻人のつどい」と会報「花巻人」の発行に加えて、「歩こう会」の後企画や「ベンベロ朗読会」との提携活動の検討も始めています。又、新しい事務所を活用して、会員が集える催しの検討も始めたいと思っています。

「花巻の活性化への貢献」ですが、こちらも例年の首都圏での各種花巻観光・物産展開催のPRと動員、会報やメルマガを通じての花巻の情報発信に加えて、地元物産品の新たなカタログ販売の企画を検討したいと思います。

今年度の具体的な活動については、7月8日（土）の「在京花巻人のつどい」の総会の部でご提案させて頂きます。是非ご参加の上ご審議頂きますよう、よろしくお願い申し上げます。

会費納入のお願いと納入状況の報告

①令和５年度会費納入のお願い

在京花巻人会の運営にご協力を賜り誠にありがとうございます。花巻人会は会員の皆様からの会費で活動を行っています。５年度の会費は同封の振込用紙でお願いします。また振込はご本人負担で110円の加算料金が必要となりましたので、会費は2,890円プラス110円、合わせて3,000円で振込頂きます様お願いします。　在京花巻人会会長　瀬川紘一

□座名　在京花巻人会
□座記号番号　00240-6-111794

②令和４年度の会費納入のお礼と納入状況

４年度の会費納入金額は３月末現在234名676,260円、他に寄付31,300円、計707,560円でした。

会員皆様のご理解ご協力に感謝とお礼を申し上げます。　会計担当　高橋良光、板垣雅子

令和５年度「第37回在京花巻人のつどい」のお知らせ

日時：令和５年７月８日(土)11:30～14:30
会場：東京ガーデンパレス
住所：東京都文京区湯島1-7-5
電話：03-3813-6211
アクセス：JR御茶ノ水駅　聖橋口

会員の活動報告コーナー

友好都市平塚市で「花巻の物産と観光展」が三年振りに開催

理事　梅津　豊

行ってきました～。

本年2023年2月23日（木祝）～26日（日）の四日間、友好都市平塚市の「ひらつか市民プラザ」にて「おいしい魅力いっぱいの花巻へ 第38回友好都市花巻の物産と観光展」（主催花巻観光協会）が開催されました。

花巻との友好都市でありながらコロナウイルスの影響から出来なかった対面販売、人から人へ、ふるさとのおもてなし再開です。友好都市締結以来毎年開催されてきた物産展ですが、今年は3年振りに平塚の皆様への直接販売、23日はお天気も良く大勢のお客様がふるさと花巻を心待ちにしてくれていました。

久し振りの対面販売出店の店では初日で売り尽くしてしまったお店もあったそうです。初日だけで2100人、最終的に4日間合計で6184人もの方々が来場されました。今回お出迎えした物産は、ブランド米「銀河のしずく」からりんご、雑穀、味噌醤油、日本酒、ワイン、南部せんべい、駄菓子、大福、よもぎ餅、漬物、白金豚、蕎麦、中華そば等々あらゆる花巻モノ（石鳥谷、大迫、東和、花巻）が平塚に再現されました。

会場である「平塚市民プラザ」にも心待ちの市民の方々から開催確認の問合せが多数寄せられ、又、常連の方もやっと来た花巻の味を懐かしみながらお互いの無事を笑顔で気遣い交流を深める様子があちこちで見られ、久し振りの物産展は大盛況に終りました。

会員の皆様、石川啄木の「ふるさとの訛なつかし停車場の人ごみの中にそを聴きにゆく」では無いですが花巻の物産展においでになり、温かなことばを、懐かしい味をお楽しみ頂ければ幸いです。

2022〝よい仕事おこし〟フェアに観光協会他出展

昨年12月6日（火）～7日（水）、東京ビッグサイトの南3・4ホールで開催された全国の信用金庫が協賛する「2022〝よい仕事おこし〟フェア」に花巻から「花巻観光協会」「ハコショウ食品工業株式会社」「結びの宿愛隣館」が出展しました。

この催しは、「よい仕事」を起こすビジネスマッチングの場を提供することを目的としています。

出展者は、「ものづくり」、「食品」、「観光・行政・学校・マスコミ」と三つのエリアのブースに出展、全部で350に近いブースが並んでおり壮観でした。

12月6日にちょうど視察に来られていた秋葉復興大臣（当時）が「花巻観光協会」のブースに寄られるところに遭遇、観光協会の小田島さんと会話をしていましたが、テレビのカメラが大臣を追っていましたので、当日どこかのテレビニュースで放映されたことと思います。（編集部）

令和5年 岩手県人連合会「新春懇親会」開催

去る2月5日（日）、岩手県連の「新春懇親会」が3年ぶりに上野池之端の東天紅で開催されました。コロナ感染対策もあり参加者は208名に制限されての開催でした。在京花巻ふるさと会からは13名が参加、大いに楽しみました。

懇親会は13時にスタート、まず工藤流津軽三味線菊詞派の家元以下3名による「津軽じょんがら節」の演奏が始まりました。

演奏に続いて、白土会長から挨拶があり、岩手県人連合会規定集の改正などのこれ迄の実績と、今年陸前高田市で開催される全国植樹祭への協力などの今年の活動計画について述べられました。乾杯は各地区のテーブルに置かれたその地区のお酒で行われ、在京花巻ふるさと会の参加者は石鳥谷の「南部関」で乾杯しました。

アトラクションの二つ目は同じ菊詞派の家元以下3名による三味線に尺八奏者が加わり、さらに2名の踊り手が登場、華やかな民謡の演奏と演舞となりました。お開きの時間が近づき、福島副会長より6月11日（日）の「第49回岩手県人のつどい」にも是非ご出席を頂きたいとの呼びかけがあり、6月再会を期しながらの散会となりました。（編集部）

日本橋お花見クルーズに参加して

去る3月26日（日）、在京花巻ふるさと会の催事「日本橋お花見クルーズ」が、在京石鳥谷町人会が幹事となって実施されました。当日は雨にもかかわらず各ふるさと会から41名が参加、在京花巻人会からは8名が参加しました。クルーズは12時20分に出航、60分桜を楽しんだ後、二次会ではお酒と懇談を存分に楽しみました。

毎回幹事さんにとっては、桜の状態と天候の予測が難しい催事ですが、今回は桜がほぼ満開、天候は残念ながら雨でした。ただ、船は屋根付きで雨は全く問題なし、むしろ雨で日本橋川も大横川も閑散として貸し切り状態のよう、かえって桜を満喫することが出来ました。

二次会は、近くの居酒屋を貸し切り大宴会となりました。久しぶりの対面の宴会で皆さん大いに盛り上がりました。2時間ほど楽しみ最後は高橋弘美会長の中締めのご挨拶でお開きとなりました。（編集部）

≪はなまき　あれこれ≫

「第２次花巻市まちづくり総合計画」策定状況の報告

昨年の会報10月号で紹介したように、市は令和５年度で終了する現在の「まちづくり総合計画」に続く令和６年度から８年間の「第２次まちづくり総合計画」を策定中です。昨年度の市民意識アンケート調査や市民ワークショップ、関係団体からの意見聴取など、市民の参加活動の状況を報告します。

市民アンケートは、昨年６～７月に18歳以上の市民から無作為で抽出した2,500名を対象に行い、859名から回答を得ました（回答率34.4%）。会報１月号でその結果の一部を報告しましたが、詳細は市のホームページで公開されています。

市民ワークショップは、23歳以上の市民39人による一般部門が昨年７月～今年１月まで７回開催、高校生以上22歳以下の市民32名は昨年７月から今年１月まで３回開催されました。ワークショップの内容も市のホームページで公開されています。

関係団体などからの意見聴取では、昨年11月から市内で活動する商工会議所や農業協同組合、PTA連合会や観光協会など10団体が、まちづくりの分野ごとに目指す姿や政策・施策の改善点等について意見を述べたとのこと。この報告書についても市のホームページに公開されています。

これまでの市民参加により市民から頂いた意見の反映状況は、第２次花巻市まちづくり総合計画長期ビジョン素案の取りまとめ時期をめどに公表する予定とのことです。　（広報はなまき2/15号から）

令和４年度「20歳のつどい」開催される

「花巻市20歳のつどい」が１月７日、文化会館で行われました。令和4年度から成年年齢が引き下げられ、「成人式」から名称を変更しての開催となりました。対象者950人にうち686人がスーツや振袖に身を包み、旧友との再会を楽しみました。

式典では、上田市長から式辞があり、高村光太郎の「道程」の一節「僕の前に道はない、僕の後ろに道ができる」を引用、一歩一歩前進することで自分の道を進んでほしいと述べました。また、対象者を代表して、20歳のつどい実行委員長の今野渉真さんと、副委員長の藤原千咲さんが20歳の決意表明を行いました。今野さんは大人としての自覚と責任を持って花巻のまちづくりを担いたいと述べ、藤原さんは記念行事を企画して花巻の良さに気づき達成感を得たと述べていました。

式典後は、「咲かせよう～最幸の未来の花巻を～」をテーマに記念行事がおこなわれたほか、出身中学校ごとの記念撮影がありました。

（広報はなまき2/1号ほかより）

賢治の町から「全国高校生童話大賞」受賞者決まる

「全国高校生童話大賞」は、花巻市が、無限の可能性を秘めた高校生の豊かな想像力と自由な表現力を発揮し、「賢治のふるさと花巻」まで届けてほしいとの思いから開催してきました。

令和４年は第21回目となりましたが、みずみずしい感性で輝きを放つ多くの作品が集まりました。応募総数はなんと148校、651編にのぼりました。その中から、最終選考の結果、金賞は該当作品なしとなりましたが、銀賞４作品、銅賞８作品、学校賞には日本女子大学付属高校が選ばれました。

銀賞は、かえつ有明高２年の熊倉友音さん、日本女子大学付属高３年の深澤未知佳さん、佐久長聖高2年の樋田優さん、時習館高２年の空井慧さんが受賞しました。

昨年の表彰式の様子

12月10日には花巻市なはんプラザで表彰式行われましたが、銀賞を受賞した皆さんは招待されて式に参列しました。表彰式では、花巻北高生による賢治作品の朗読や、花巻農高生による鹿踊が披露されました。

（広報はなまき1/21号より）

花巻市は非核平和都市宣言のまち

花巻市は、全ての核兵器の廃絶と軍縮が推進されることを強く願い、平成18年３月に「非核平和都市」を宣言しました。市は、この宣言を推進し、市民の皆さんの非核平和に対する意識の醸成を図るため、さまざまな活動を行っています。

昨年、市内の小学５・６年生を対象に非核平和学習会を開催しましたが、この催しもその一環です。学習会では、広島から講師をお呼びし、一瞬にして多くの命を奪った原爆の恐ろしさや戦争の悲惨さ、平和の尊さについて考える学習、花巻市博物館による花巻市の空襲に関する講座などがありあました。

この学習会に参加した子供たちの感想文の一部が「広報はなまき」の10/15と1/11号に紹介されています。少しその内容を報告します。なお、参加した児童が書いた感想文は、市のホームページに掲載されています。

多くの子供たちは、広島・長崎に原爆が投下されたことは知っていても、本当の原爆の恐ろしい威力は学習会で初めて理解出来たようで、核兵器のない世界がどれだけ大切か納得したようです。又、花巻駅や似内駅、そして花巻の中心街が空襲にあったことを初めて知った子供たちも多く、平和が他人事ではないことを実感したようです。

（広報はなまき10/15、11/1号より）

「第65回元祖わんこそば全日本大会」３年振り開催

去る２月11日、市内若葉町の花巻市文化会館で第65回わんこそば全国大会が３年ぶりに開催されました。「わんこそば」の歴史は古く、400年以上前に遡ると言われています。なお、２月11日は「わんこそば記念日」となっています。

制限時間内にお椀に盛られたそばを食べた杯数を競うこの大会ですが、３年振りの開催で応募多数で抽選があったようですが、小学生の部10組30名、団体の部40組120名、個人の部30名の３部門で台湾や県内外などから集まった計180人の「食士」が参加。会場の応援を力に、高校生の給仕さんと呼吸を合わせて次々とそばを流し込んでいました。

小学校の部は、南城フェニックスチームが優勝、団体の部は、連覇中の「最速ファイターズ」（東京都）が優勝し３連覇となりました。個人の部で第65代横綱に輝いたのは、５分で228杯を平らげた岩淵恭史さんで、２位と２杯差の接戦を制して会場を大いに沸かせました。ちなみに、これ迄の最高杯数は第58回大会で記録された258杯です。

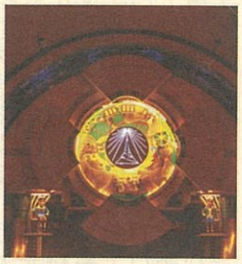
その他、民放アナウンサー対抗戦や郷土芸能の演舞なども行われ、会場は盛り上がりました。会場内には雑貨などを販売するマルシェ、会場外には多数のキッチンカーが出展し参加者を喜ばせました。特に会場外のキッチンカーには、当日晴天でも前日までの積雪が多い中、久しぶりの大会に気持ちが昂った観客が大勢押しかけ、それぞれキッチンカー自慢の食べ物を楽しんでいました。

（広報はなまき3/1号、商工はなまきホームページなどから）

なはんプラザからくり時計「銀河ポッポ」復活

昨年11月19日、花巻市定住交流センター「なはんプラザ」のからくり時計「銀河ポッポ」の修理工事が終了しました。銀河ポッポは、賢治の童話「銀河鉄道の夜」をモチーフとしたからくり時計で、午前10時～午後10時の毎時１分前から照明が輝き０分で中央の文字盤が開き、小泉まさみさん作曲による「銀河鉄道ワルツ」に合わせて右側からジョバンニ、左側にカンパネルラが下りてきて愛らしく手を振ります。

平成４年の同センターの開館から長年多くの人に親しまれてきましたが、令和３年11月に文字盤の扉部分の不具合で稼働を停止していました。修理したのは設置当初から製作に関わった妹尾大介さん。「修繕に伴って設計図や配線など見やすく整理しました」と述べ、メーカーは、銀河ポッポは同メーカーが手掛けた東北最古のからくり時計なので次世代に引き継がれるよう、メンテナンスのしやすさを意識したとのことでした。



「おおはさま宿場の雛まつり」３年振りに開催

「第26回おおはさま宿場の雛まつり」が２/23～３/５、３年ぶりに大迫町の中心部で開催され、多くの見物客で賑わいました。

この雛まつりは、子供たちが家々を巡り「おひなさん、お見せってくなんしぇ」とひな人形を見て回った風習を受けて、26年前に商工会によって企画されたもの。大迫は盛岡と三陸を結ぶ宿場町として栄えましたが、金や葉タバコ、養蚕などで財をなした商人達が高価なひな人形を購入し、代々受け継がれてきました。24ヵ所で約2000体のひな人形が飾られ、久しぶりに訪れた見物客を喜ばせていました。

メイン会場の大迫文化交流センターには500体ほどの江戸時代に作られた古今雛が飾られ、特に300年前に作られた享保雛は貴重なひな人形で見物客の注目を集めていました。同会場では箏演奏や町内有志によるチンドン屋「早池峰一座」の興行も披露されました。

（岩手日日新聞、ヤフーニュースから）

花巻市民芸術祭「第16回文芸大会」から

花巻市民にとって生涯学習の大切な発表の場として開催されてきました市民芸術祭。令和４年11月12日には、まなび学園で第16回文芸大会が開催されました。この大会の入選作の一部を紹介します。

〈短歌〉

天位　芋麻を食むカモシカと目が合いて
　　なお食むさまに 可愛さ憎さ　多田美和子

地位　横浜に生まれし友は疎開にて
　　この町住み生涯終えむか　平沢裕子

人位　イヤホンに流れる曲は「少女レイ」
　　歌詞を理解し涙溢れる　菅原輝空

〈俳句〉　特選

四歳児五時間歩き夏の山　松田萌

敬老日卓球ラケット空を切り　多田ゆう湖

秋彼岸父祖伝来の茶渋かな　多田ゆう湖

秋茄子や曲がりくねりの母の指　熊谷敏子

〈川柳〉　小学生・中学生特選

色づいていろんな望み虹になる
　永喜多優花（湯本小６年）

旅行先母のポケット無限大
　佐々木詩花（湯本小５年）

将来は夢と希望にあふれてる
　小原　晄（西南中１年）

ポケットに僕の未来がつまってる
　菊池元慈（西南中１年）

（広報はなまき12/15号より）

≪首都圏で「花巻」と出会うコーナー≫

話題の「金環日蝕」の作者阿部暁子さんは花巻在住

昨年10月に出版されたミステリー小説「金環日蝕」が話題になっています。作者は花巻出身で現在も花巻市に住んでいる阿部暁子さんです。

ストーリーは、「知人の老女がひったくりにあう瞬間を目にした女子大生春風は、その場に居合わせた高校生錬とともに犯人を追ったが間一髪で取り逃がしてしまう。春風は一人で犯人捜しをしようとするが錬に押し切られて２日間だけ探偵コンビを組むことになる。かくして大学で犯人を突き止め、それですべてが終わるはずだったのだが…」。そこからストーリーは、特殊詐欺や貧困問題、引きこもりなどの家庭の問題などを巡って目まぐるしく展開し、つい引き込まれて読み進んでしまいます。

もともと青春ドラマ仕立てですが、社会派の上質なクライムミステリーとなっており、読者を引き付けているのだと思います。又、ストーリーと共に人物の描き方が鮮やかで、若い読者は作中の人物に意中の俳優を当てはめながら読んでいるのではないかと想像してしまいました。映像化が待たれる作品です。

作者の阿部暁子さんは花巻北高校出身、１年生の時に高校総合文化祭の文芸部門で短編小説が入選、同じく２年時は県の最優秀賞、３年時には全国最優秀賞を受賞しています。大学４年には集英社の雑誌コバルト短編小説新人賞に入選、2008年に「屋上ボーイズ」で同社の第17回ロマン大賞を受賞して文壇にデビューしています。

その後の作品では、「どこよりも遠い場所にいる君へ」がベストセラーに、「パラ・スター＜Side百花＞」「パラ・スター＜Side宝良＞」二部作は「本の雑誌」が選ぶ2020年度文庫ベスト10の第１位に選ばれたほか、「鎌倉香房メモリーズ」全５巻、「また君と出会う未来のために」、「室町繚乱」などがあります。

阿部さんはインタビューで「どんな町で育ったのでしょう？」との質問に、「宮澤賢治が生まれた岩手県花巻市で育ちました。周りは自然が多いので、昔話を聞いても普通にそのへんで起こりそうだと感じていました」と話しています。（編集部）

シス・カンパニー公演「ケンジトシ」好評裏に終わる

舞台製作や俳優のマネジメント等を業務とする芸能事務所シス・カンパニーの公演「ケンジトシ」は、今年３月７日に東京三軒茶屋のシアタートラムで初日を開け、３月10日に大阪サンケイホールプリーゼを最後に、大好評を得て終了しました。

「ケンジトシ」は、作は北村想、演出が栗山民也、キャストはケンジに中村倫也、トシに黒木華、ホサカに田中俊介、イシワラに山崎一など。劇作家北村想は賢治の童話をもとにした戯曲「想稿・銀河鉄道の夜」や「雪をわたって」などを書いています。又、出演者も一流の俳優を配していることから、この公演は高い評価を受けて連日満員となりました。

また、トシは1922年11月27日に24歳で亡くなっており、昨年2022年はトシの没後100年の節目の年でした。「喜びのときも、悲しみのときも、常に日本人に寄り添うかのような賢治の言葉の数々。その賢治の傍らには、彼の良き理解者と言われ、精神的な支えでもあったトシの姿が…」（プログラムから）。

岸田國士戯曲賞ほか数々の賞を取っている北村想が、「賢治の作品と膨大な資料を渉猟し、ご自身の想像（創造）と空想をたっぷり加えて編んだ作品。賢治の精神世界に妹トシの覚悟と意志、同時代の軍人で賢治とは異なる視座で理想郷を追い求めた石原莞爾の野心をも接続し、舞台上を広大無辺な宇宙に見立てている難物」と、演出家栗山民也がプログラムでコメントしています。（編集部）

朝日新聞日曜版で「呑んべえ漬」を紹介

昨年の12月10日（日）の朝日新聞日曜版の「お宝発見ご当地食」のコラムで、ハコショウ食品工業株式会社の「呑んべえ漬」が紹介されました。

埋蔵エリアは岩手県花巻市、「キュウリパリッ　酒が進むうま辛」というキャッチコピーで紹介されました。当初は辛すぎるとの声もあったようですが、一切の味の変更を受け付けなかったとのこと。すると「辛いものマニア」の間で評判となり、販売から42年、逆に「もっと辛く」の声に応えた「爆辛」も登場。その反動で「辛ZERO」をつくると、今度は家族そろっての呑んべえ漬ファンも生まれたとのこと。

ハコショウ食品工業は、明治時代に菓子製造の「箱崎庄吉商店」として創業した100年以上続く企業。大正に入ると、みそ・しょうゆの醸造や漬物製造を開始します。「酒好き」という先代が、同社のある石鳥谷が南部杜氏の里と呼ばれる地域でもあり、長年の発酵技術を生かし、酒に合うさかなの開発に情熱を傾けて生まれたのが「呑んべえ漬」だったとのこと。

地元岩手県産のキュウリ、シソの実、昆布などを唐辛子が利く特性しょうゆだれで漬けた、上手くて辛い漬物。自社販売のほか、県内の主要スーパーやお土産店で販売。（編集部）

寄稿

花巻電鉄幻の轍

世界一幅の狭い馬面電車をしのぶ

東和町友会　会長　蟹澤　政志

〈はじめに〉

在京東和町友会の蟹澤政志会長からの寄稿です。蟹澤会長は多芸多才で知られていますが鉄道にも造詣が深く、自営の鉄工所でドラム缶や廃材で四分の一スケールの機関車C40－1577号を製作、子供たちを乗せて走らせることもあるとのこと。今回は花巻電鉄がテーマですが、多芸多才ぶりの紹介は次の機会に譲りたいと思います。

花巻電鉄の起源は、南部藩の城下町として古くから栄えた花巻に電力の供給を行うため湯口村松原に水力発電所を建設したのが「花巻電気」で、同社は送電線を中山街道沿いに設置した。その電力と送電用の電柱を利用して電車軌道を敷設するアイディアが花巻電鉄のルーツである。

1913（大正2）年に花巻電車軌道が設立され、花巻川口町－湯口村間8・2㎞を馬車軌道（軌間762㎜）敷設の特許を得て、1915（大正4）年9月16日開業した。旅客車は道路巾の関係から車体最大幅は1600㎜しか採れなかった。車体は木造学車デハ1の1両のみ、この狭い車幅の電車はほどなく沿線住民ならず湯治客の足として慕われ、馬面（うまづら）電車と呼ばれ親しまれることとなった。

車体巾1600㎜は例えばトヨタのミニバンボイシーの幅（1695㎜）より狭く、1200ccクラスの車と同車内の内幅は1360㎜と非常に狭く座席で対面する客同士の膝が当たる状態であった。その車内に湯治客が布団袋に布団・食器・米・野菜等を詰め込み持ち込むものだから、客は布団袋の上をドロ履きのまま移動したので、今では想像すらできない珍事だった。その後1925（大正14）年西花巻－花巻温泉間8・2㎞が開業し、1926（大正15）年中央花巻－西鉛温泉間17・6㎞が開業した。

当時の花巻のターミナルは、東北本線の花巻駅ではなく市街地中央の岩手軽便鉄道釜石線の花巻駅に乗り入れた。これは岩手軽便鉄道が市街地に近く、何よりも軌間（762㎜）が同じであった事が敷設の決め手になったと思われる。花巻温泉線の「鉄道線」と西鉛温泉に向かう「軌道線」の2路線からなっていた。花巻温泉線は西花巻を起点に花巻（現JR花巻駅）を経由して花巻温泉に至り、もう一方の鉛線は中央花巻と西鉛温泉を結んでいた。

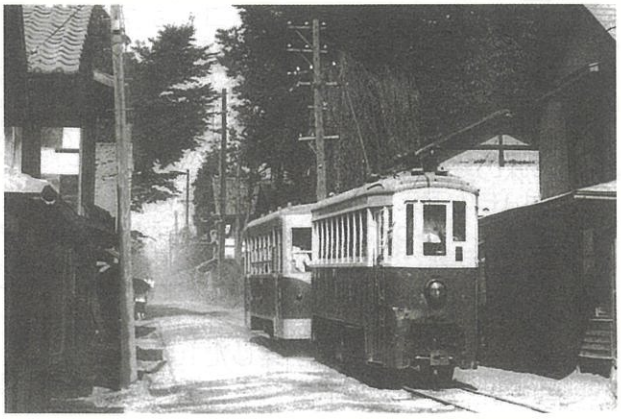
鉛線が電化され電車運転が可能となったのが1925（大正14）年11月1日、車両も増えてデハ1－3両、サハ4が1両の4両体制となった。花巻温泉線は、花巻西北に構えていた台温泉を引湯して花巻温泉が造成される計画が起こり、西花巻から東北本線花巻駅を経由して花巻温泉に至る路線が1925（大正14）年8月1日に開業した。しかし変電所や車両の搬入が遅れたことから岩手軽便鉄道から蒸気機関車・客車を借りてのスタートとなった。電車運転が始まったのは2か月後の10月3日で車両6両で運転を始めた。岩手軽便鉄道からの車両借入れはこの時だけではなく、1931（昭和6）年8月16日に発生した車庫火災で多数の車両が消失した際にも実施されている。

岩手軽便鉄道は1943（昭和18）年9月17日軌間1067㎜（現在の在来線と同じ）の改軌となり現在のJR花巻駅に乗り入れるルートとなり、これに伴い鉛線、花巻温泉線の両線とも国鉄の花巻駅を始・終点とする列車が主となった。社名は幾度となく変更され花巻電車軌道・盛岡電気工業・花巻温泉電気鉄道・花巻電気鉄道・花巻温泉電鉄・最終的には1953（昭和28）年花巻電鉄となった。

花巻駅はホームが5番線まであり、1番線は釜石線、2番線は東北本線上り、3番線は下りの国鉄線、4番線5番線は花巻電鉄線のホームであり跨線橋で結ばれていた。小学生の頃毎年秋に親に連れられ温泉に行くのが唯一の楽しみで、花巻駅はホームが5番線まであり電車も走り大都会だと感動したものだった。特に未舗装道路の軌道をゴトンゴトン轟をたて、左右にグラグラ揺れながら土埃を巻き上げて走る電車の勇姿を小学生ながら食い入るように眺め続けた事を今も脳裏に焼き付いている。

1954（昭和29）年9月25日大沢温泉の自炊部に父親と宿泊中、露天風呂に台風15号の強風で栗の毬や胡桃の葉っぱ等が沢山飛んできて風呂に入れなかった。翌早朝館内のラジオニュースで青函連絡線洞爺丸が函館港外で沈没したと報じられていた。死者1155名の日本最大の海難事故であったことも忘れられない。大沢温泉の自炊部「湯治屋」は現在も当時の面影のままで秘湯ブームもあり大繁盛している。

1969年（昭和44年9月1日）花巻－西花巻－西鉛温泉間が廃止となり続いて1972年（昭和47年2月16日）花巻－花巻温泉間が廃止となった。多くの夢・多くの思い出を運んでくれた今は幻の〝轍〟を思うと走馬灯のように蘇ってくる。戦後の混乱が落ち着いて来ると人々の心に余裕が芽生え、昭和30年代の花巻・志戸平・大沢・鉛温泉の湯治客が次第に増えていき、また通勤・通学客も伸び続け1960（昭和35）年度の輸送旅客数は288万人と黒字経営であった。まさに黄金期と呼べた昭和30年代であったが、昭和40年代に入った途端に人口減少、バスに押され規模縮小の道を歩き始めたのだった。



思い出コーナー

〈賢治さんの思い出シリーズ 番外編〉

鈴木健司氏著「宮澤賢治文学における地学的想像力Ⅱ」に掲載された「橋本利平氏の賢治さんの思い出」

瀬川紘一（花中31年卒）

〈はじめに〉

賢治さんの思い出シリーズの最後は、郷土の先輩であり会社の先輩でもある橋本利平氏（＊）の「賢治さんとの思い出」を収録している文教大学教授の鈴木健司氏（＊＊）の著作「宮澤賢治文学における地学的想像力Ⅱ〈岩頸〉表象の検証と精神医学的鉄筋」を紹介し、併せて橋本利平さんの「短歌集」から短歌を数首紹介します。

十数年前に突然会社の後輩の岡本久暢さんから、同じ職場で長く一緒だった橋本さんと年に1～2回会っているけれど一度一緒に飲みませんか、とお誘いを受けました。しかし、なかなかお会いする機会を作ることが出来ないでいるうちに、2021年の3月に橋本利平さんが98歳でお亡くなりになったと、岡本さんから知らされました。

その後岡本さんから、橋本さんを自分が理事をしている文教大学の教授である鈴木健司氏に紹介し、橋本さんの宮澤賢治との思い出を聞いて頂いたと報告があり、昨年お会いした時にそのインタビューを収録した鈴木健司氏の前述の本と、橋本利平さんの「短歌集」を頂いた次第です。

本著の補遺の4として「聞き書き・宮澤賢治に関する橋本利平氏の証言三題　花壇　温泉　巌窟王」と題された橋本利平氏の賢治の思い出の記述があります。橋本さんの話された内容をかいつまんで紹介します。

〈橋本利平氏と宮澤賢治の関係〉

橋本利平氏の母ミツさんは賢治の母イチさんといとこの関係にあり、利平氏と賢治はまたいとこ。利平氏の母ミツさんは賢治の一つ年下で、幼い頃よく一緒に遊んだとのこと。また、ミツさんの兄橋本英之助氏（呉服商大津屋の当主）は賢治の一つ年上で良く遊んだ間柄であり、盛岡中学では賢治と同じ寮で暮らしています。大津屋の橋本家と賢治の母方の実家宮善の宮澤家とは婚姻関係があり、賢治にとって橋本家は母方の祖母が生まれた家になります。

〈証言1　花壇づくり〉

利平さんは小学校2～3年の頃、賢治が自分の庭にいるところを見て、「ああ、この人が宮澤賢治さんか」とすぐ分かったようです。作家としてではなく、母のまたいとこで人格者の宮澤賢治さんという気持ちだったと話しています。

賢治さんは家の花壇を作ってくれていましたが、花壇はレンガで作られ、ダリアの真っ赤な花が咲いていたとのこと。又、賢治さんは叔父の英之助氏の家の花壇も作っていたと述べています。（橋本家別邸は、現在は「茶寮かだん」、会報67号で紹介）

2020.03.01 自宅にて

〈証言2　花巻温泉郷〉

母から聞いた話として、昔は夏になると宮澤家と橋本家は一緒に志戸平温泉や大沢温泉、鉛温泉などに出かけ、自炊をしながら一夏を過ごすのが普通だったとのこと。母の記憶では、志戸平温泉で賢治さんは川の中から恰好の良い石を見つけ、ナイフか何かで目鼻を彫り付けて川の中に放り込み、何年かして誰か見つけたときそうとう古い昔のものかと問題になるかおもしれないと言ったそうで、いたずら心でやったようです。

〈証言3　巌窟王〉

これも母から聞いた話として。橋本家や宮澤家のような地主には蔵が一杯ありましたが、母が小学校4～5年ころに賢治さんがお母さんの実家の宮善の蔵にいとこたちを集めて、自分だけ米俵の高いところに座り「巌窟王」の話を聞かせていたとのこと。利平氏のお母さんなどは、感心して聞いていたそうです。

本著では、鈴木健司氏がそれぞれの証言に詳しい注を付け、さらに「証言の意義と展開」として、各テーマについて利平さんの証言の背景やその意義について詳しく書いています。ここでは、橋本利平さんの賢治さんの思い出のコメントだけを紹介させて頂きました。

最後に、橋本利平さんの「短歌集」から、賢治短歌を紹介します。平成9年1月（利平氏74歳）に短歌会に入会、平成29年9月に『橋本利平「短歌集」』を上梓しています。

平成14年1月歌会

ふるさとの庭に　宮澤賢治　佇ちし日の
ダリアは今も　胸に燃えおり

平成28年1月歌会

二階より　ピアノの音流る　懐かしき
賢治の作りし「星巡りの歌」

平成28年5月歌会

北上の　岸に「イギリス海岸」と
賢治名付けし　砂岸残れり

「花巻での幼き日のわれ」として

平成14年6月歌会

下校道　桑の実食べたっけ　遠景に
鉄橋わたる　汽車ポッポがゐて

（＊）**橋本利平**（はしもと・りへい）
1922年岩手県花巻川口町生まれ。岩手県立花巻中学校を経て1941年慶応義塾大学経済学部予科に入学。3年時に学徒動員で弘前師団北部第16部隊入隊。復員後1947年同大学を卒業、大同製鋼株式会社入社、1953年株式会社電通入社。

（＊＊）**鈴木健司**（すずき・けんじ）
1953年埼玉県生まれ。埼玉大学教育学部、早稲田大学教育学研究科修了。高知大学教授を経て、現在文教大学文学部教授。博士（学術）。宮澤賢治学会会員。著書に、「宮沢賢治　幻想空間の構造」「大江健三郎研究―四国の森と文学的想像力」など。